

総じて、本書は、在来の類書に見られない野心的な試みとして評価される。同時に若干の不備も指摘されるが、これらはまた今後の課題となろう。惜しむらくは、一方で台頭しつつあった世俗文学との関係が、毫も触れられていない点である。

木村彰一著『古代教会スラブ語入門』白水社, 東京, 1985

千 野 栄 一

木村彰一著『古代教会スラブ語入門』（1985年 東京 白水社）は著者が本書出版後一年を経ずして幽明境を異にしているので、著者の長くしかも活発であったスラブ文献学研究の総決算ともいえる本で、またそれにふさわしい見事な出来栄の本である。そもそもスラブ学界においては「古代教会スラブ語文法」を書くということは最高に榮譽あることとする暗黙の了解があり、そのため多くの学者が満を持して執筆にとりかかるので、本の出版後年を経ずして著者がなくなるケースはそう珍しい事ではない。著者は『古代教会スラブ語入門』の原稿を十数余年も前に書き上げており、いよいよ諸大学の講義を終える最後の時期になってこれをまとめる決心を堅め、それを実行に移して完成したものである。すみずみまで配慮のいきとどいたこの本を見れば、誰の目にもこの著書が一朝一夕にできたものでないことは明らかであろう。

古代教会スラブ語というのは9世紀から11世紀までのスラブ文語を対象とする。この時期に書かれたしかも方言示な特徴により一定の制限のある文献の数は全体としてそう多くない。また、この50年を見てもいくつかの碑文と、1960年にブルガリアの一寒村エニナ (Enina) で発見された「エニナ・アポストル」の他に新しく見つかった資料はなく、従ってスラブ文献学者は実質上同じ資料を前にして「古代教会スラブ語文法」を執筆するスタートにつくことになる。それにも拘らず種々様々な「古代教会スラブ文法」が出版され、そのうちのあるものは名著として評価され、あるものは忘れられていくのは、執筆に際していかなる目標を立て、それをどのように実現していくかにかかっている。

著者は「まえがき」(p. 5) の中で、古代教会スラブ語の持つ意味に触れ、

諸外国のこの言語についての基本参考文献が日本の読者にはレベルが高すぎると考えて、自著を著わしたとその刊行理由を述べている。そして、それに続き「本書はもっぱらわが国の初学の人びとを対象とした文字どおりの入門書であって、要するにできるだけ早く読者にテキストの読解力をつけていただくという実用的な目的しか持っていない」と述べている。しかし、「文字どおりの入門書」という表現は著者の謙虚な気持を表現しているものであって、入門書といっても実に充実した内容を持っており、ただ著書がどのような本を書こうとしたかの意向がこの著者に「古代教会スラブ語文法」ではない「古代教会スラブ語入門」という題を選ばせたのである。

著者のいう西洋諸学者の手になるより高度の標準的ハンドブックは、研究者の目標の立て方によってそれぞれ異なっている。例えば、古代教会スラブ語のテキストを読むのに必携の書といわれる Diels の本は実際のテキストに出ている形を網羅した本であり、Lunt の文法は構造言語学的立場から書かれている。このように見てみると、木村彰一著『古代教会スラブ語入門』は時代的にも地方的にも数多くのバリエーションが観察される古代教会スラブ語のテキストを基礎にいささかの「ゆれ」を認める規範文法を立て、その規範からの逸脱は本書中で説明するという方法をとっている。これがすなわち著者のいう実用的な目的の基礎にある考え方である。

この著書がもっとも有効に利用されるのは最後の部分 (pp. 155-183) のテキストを実際に読み、そして当該の箇所を本文中で参照する読み方であろう。こうして読んでみると、本書を冒頭から読んでいったとき、無意味なように見えたいろいろな記述がいかにも有機的に関連しているかが明白になってくる。またテキストを読んでいくと問題と思われる箇所や、やや珍しい形にはすかさず注がついていて、スラブ語の一つを知っていて、丁寧にテキストを読むことのできる人なら独習すら可能である。

著者がある一つの観点からの古代教会スラブ語の記述を求めたのではなく、この言語のテキストを読めるような手引きを目指したとすれば、この本は教育的な見地が実に見事に生かされており、100% 成功した本である。この本のテキストを読んで、実際に問題点を一つ一つ当って見ると、このあまり大きくない本の中にあらゆるケースについて説明があり驚歎せざるを得ない。しかも、本文の記述が単なるテキストの注の寄せ集めでなく、全体として一つの言語の記述になっているのであるから著者の並々ならぬというか天才的な才能を感じざるを得ない。残念ながら著者がすでに亡くなっているので確かめるすべはな

いが、思うに十数年前のこの本の大枠を書き上げたとき、全体的な言語の記述をすませ、今回この本の出版に当たりテキストを選んだ段階でこのテキストに出てくる規範に外れた形や表現への説明を全体的な枠組みの中に組み込んだものと考えられる。

教育学的見地から見て古代教会スラブ語でこれ以上の入門書が今後日本で出版されるとは考え難く、少なくとも50年は役に立つし、もしかすればそれ以上も長い年月の使用に耐えるものとする。

優れた入門書を書くということは教育学的配慮の他に、どれだけの素材を入門書に取り入れるか、という選択の問題や書かれた事実が正しく、正確であるかが問題になる。この点でも本書は実によくその要請を満たしている。

本書は既述の「まえがき」のあと、目次が続き、次に主要参考文献 (p. 10) が来る。この参考文献の中の文法書はよく精選されている。この中で Gorškov A. L. と Xaburgaev G. A. それに Nikiforov S. D. の三冊の本は日本でも入手が容易であったこと、筆者と同じような入門書を目指したことなどの理由から参考文献としてあげてある理由が理解できるが、評者の考えでは Bielfeldt H. H., Mirčev K., Nandriš G., Rosenkranz B., Schmalstieg W. R., はなくてもよかったと考えられる。そして、逆に Weingart M., *Rukovět' jazyka staroslověnského, I-II, Praha 1937-38* はあった方がよかったのではないであろうか。また「歴史的背景」の中に Jagić V., *Entstehungsgeschichte der kirchenslavischen Sprache, Berlin 1913* はあげられているべきである。

なお文法書の中で本邦最初の古代教会スラブ語文法である小川利治, [古代] 教会スラブ語文法, 東京 1971 があげられているが、この書をあげるのに他の参考文献との間に一行空けてあるのは、筆者がこの本が本邦最初の本として評価はするがその他の参考文献とは同列でないことを示したものと考えられる。

pp. 13-28. に手際よく整理されている「序論」は簡にして要を得ているとしかいいようがなく、実に明快に叙述されている。この中でも「スラブ人の使徒」に関する一章は上述の小川利治著『[古代] 教会スラブ語文法』に全く欠けている部分で、しかもスラブ学の基本に触れる部分であるのでとりわけ大切である。またそれに続く「4. 古代教会スラブ語の伝播—その文化史的意義」(pp. 22-25) も日本語で書かれたのは本書が初めての貴重な章である。

次の「文字と音」(pp. 29-50) もこの本の評価を高める一章で、これは著者が単に優れた文献学者であっただけではなしに、アイヌ語の方言調査にも行

ったことのある言語学者で、しかも言語音に対して鋭い感覚を持っていたことがこの章に反映している。文献学者あるいは言語学に携ったことのない人による言語音の記述はしばしば不正確であるが、著者は時代と地域で「ゆれ」のある古代教会スラブ語のテキストに反映した音の変化を巧みに整理しており複雑な状況がかなり簡単化されて捉えられている。この章の良さはこの部分を読んだだけでは理解できず、後に付けられているテキストを読むとき突然その価値がでてくるところにある。

なおこの章の中のグラゴール文字とキリール文字のいずれがより古いかという証明の中に (pp. 22-23), 著者が p. 38 で書いている「数の配列が *glag.* では字母の元来の (つまり制定者が定めた) 順序に拠っている」という一項は加えた方がよいと考えられる。また山の字がグラゴール文字とキリール文字では同じであっても、グラゴール文字では山の字の初期の字形に右にやや上った山という形が知られているので、キリール文字からグラゴール文字への借用は考えられず、グラゴール文字からキリール文字が借用したと考えざるを得ないという事実も加えておいた方がいいであろう。また、大した問題ではないが p. 33 の c) にあげられている *palimpsest* に、キリール文字を削ってグラゴール文字を書いたものは「一点も発見されていない」というのはいい過ぎで、そのような *palimpsest* はあるにはあるが、そこで書かれているグラゴール文字は時代的にははるかに後の角ばったクロアチア・グラゴール文字であると訂正した方がいい。

「形態」(pp. 51-153) と名付けられたこの本の最大の章もよく整理されている。著者はまず品詞の分類から不変化詞 (変化及び活用をしないもの) と変化詞を区別し、後者を体言と動詞に分けている。ここで体言とは *nōmen* の意味である。

体言のうち名詞の変化の分類はほぼ一般的な分類であるが、著者は *u*-語幹 **сѣнь** を一つのパラダイムと認めず、第一変化—男性 (すなわち *o*-語幹) の例外形として扱っている (pp. 64-65)。たしかに *u*-語幹に属する名詞は非生産的で、その数は少ないし、混合した変化形がよく現われるのは事実であるが、名詞変化の全体像から見た場合、*u*-語幹のパラダイムを立てる方がより分かり易かったと評者は考える。

活用に基づく動詞の分類は著者が一番苦労したところである。この点に関しては名詞におけるほど一般に認められた分類はなく、先人の業績においてもいろいろな方法がある。著者がこの本で採用した方法は動詞の現在変化における

人称語尾を重視する考えで、-e- が出る第一式と -i- の出る第二式に分類し、その他を不規則と呼ぶ。そして、第一式は現在語幹により A. B. C. の三つに分け、さらに不定法語幹の音節の数と、語幹末の接尾辞や音により A では 1. 2. 3., B では 1. 2., C では 1. 2. 3. の三つないし二つのバリエーションを立てる。第二式でも不定法語幹により 1. 2. 3. の三つの下位区分がある。このように現在語幹と不定法語幹の組み合わせにより動詞を分類することはすべての文法書で行われているが、一長一短があってまだ最終的な優劣はつけ難いのが現状である。著者が選んだ分類もその一つであるが、はたしてこれが最上であるかどうかは今後の研究に俟たなければならない。

「形態」の章を通じて目につくことはパラダイムが完備していることである。著者のいう西洋諸学者の文法では、代名詞の変化なり、分詞の変化なり、形容詞の比較級の変化なりがしばしばこれこれの格の外は「～の変化と同じ」という形で処理され、初学者によく理解されないのに比して非常に丁寧にパラダイムがあげてある。これは著者が意識したこの本の一物徴である。

「形態」の章は動詞の形態の説明のあと、用法が来て時制、法などの基本的用法について述べられ、とりわけ分詞の用法が詳しく述べられている。この分詞の用法が一番難しいので、これについての説明が実際の例について述べられているのは非常に役に立つ。そして独立与格、目的分詞、受動構文など古代教会スラブ語の文法での問題点についての指示があり、一部は統語論にまで言及している。

このあと「体の形成」という一章があって、はたしてこの章が「入門」に入るものかどうかという気がするが、この章もテキストを読んで疑問が出てきたとき役に立つ構成になっている。

最後に来る「テキスト」(pp. 155-183)と「語彙」(pp. 185-211)はこの本の全体の約四分の一を占め、著者がいかにテキストを読ませることを重視したかが理解できる。テキストは最初に標準化正書法によるテキストをあげ、以下グラゴール文字の写本のテキスト、キリール文字の写本のテキストの順で続き、それぞれ福音書を主体に、前者ではシナイ詩篇、後者ではスプラシル写本があがっていて、聖書のようには訳が入手し難いスプラシル写本には邦訳がつけられている。もし全体の構成を気にしないのなら、福音書に続いて詩篇を読み、最後にスプラシル写本を読むのが難易度の順から正しい順序である。このテキストの選択も理にかなっていると認められる。

「テキストの注」は実に適切で、本文の説明とよく合っている。この注がな

ければ初学者がテキストを自習するのは困難であろうと思われるところには必ず注がつけられている。願わくばこの注がテキストの後にまとめられていず、それぞれのページの下にあったなら一層便利であったに違いない。

以上見てきたように木村彰一著『古代教会スラブ語入門』は稀に見る好著で、日本のスラブ学のレベルを一挙にこの分野の先進諸国のレベルへと近付けた名著である。従って著者が「まえがき」の中であげた目標は十分すぎるくらい十分に達成されている。著者が早くもこの世を去ったのは何としても残念であるが、後進の者にこの著を残していつてくれたことには神の摂理すら感ぜられる。評者の考えでは「古代教会スラブ語文法」を書こうとする者は西洋古典学、言語学、スラブ文献学の素養が三本柱として必要であるが、この三つを備えた著者が教育的見地を重視したところにこの名著が生まれた基盤がある。文字通りの絶品である。恩師にもあたる著者のことを評者ごとき者があれこれいうのは不遜であるが、著者の残された数々の輝かしい業績の中でももっとも学問的香気が高く、恐らくもっとも長くこの世に残る作品であり、何よりも無駄なことが一つも書いていないというのは素晴らしい事である。

これまで述べてきた長所と比べれば、とるにたらぬ欠点であるとはいえ、約50程の印刷ミスがあり残念である。著者も生前このことに気がつき、自ら正誤表を関係者に配付していたので、再版の際には訂正されるものと信ずる。その多くは単なるミス、例えば **Б** と **В** の混同のようなものであるが、103頁上から5行目、第2活用人称語尾複数3人称形は **-отъ** ではなく **-ѣтъ** で、これはパラダイムの中のことであるので罪が重い。しかし、これすらも次の頁の説明を読めば気がつかないわけではないし、誤植訂正の紙も挿入されている。

「テキストへの注」は十分すぎるくらいよく付けられていて、文字通り入門にふさわしい配慮がなされている。ただ次の二つの箇所は注があってもよかったと思われる。

その一つは p. 163 の上から10行目の **розьство** で、これは p. 205 にあるように、マリア写本以外では **рождѣство** が対応する。(本書ではこの **рождѣство** が、**рож (!) дѣство** と誤記されている)

この **розьство** はスラブ祖語の *dj が、南スラブで жд で対応するのに対し、チェコ語では з が対応する例で、ボヘミズム(モラビズム?)の例である。この箇所は Weingart M., Rukověť jazyka staroslověnského, Praha 1937 の p. 81 にもあげられているように、古い写本(この場合はマリア写本)に残った初期の訳の形を伝えているものと考えられている。なお **розьство** とい

う形はクローツ文書にもあり、14a の3に単数与格 **рожда́ствоу** の形で、また14a の1では **ро́зство** の上に **жади** が書き加えられた貴重な形が残されている。(Dostál A. Clozianus Praha 1959 p. 101)

もう一つは本書の p. 168, シナイ詩篇2の10にある **накажѣте** で、これは p. 114 の命令法のパラダイムにあるように **-ite** が予定される形である。しかしここでは現在語幹が硬子音で終る IA 型以外にも拘らず **-ěte** が来ているのであるから、なんらかの注が必要であったであろう。このような形については Kurz J., *Učebnice jazyka staroslověnského*, Praha 1969 p. 126 に「古代教会スラブ語文献中における命令形」なる章があり、その d) に次のような記述がある。「d) 次に第Ⅲ式の動詞の命令形だが、若干の動詞（現在語幹が **-ajo**, **-ějo**, **-ujo** で終る派生動詞を除いて）では予期される **pokažite**, **pijete**, **glagolite** の他に **-ěte** で終る形がある」

もっとも上記二つのケースは「入門」の枠を越えていると考えられないわけではない。

結論として簡単にまとめると木村彰一著『古代教会スラブ語入門』はスラブ学の一流先進国にも滅多にないような優れた入門書で、日本の古代スラブ学のレベルを一挙に高めた名著である。何よりもありがたいのはこれまで定訳のなかった数々の術語に適切な訳がつけられていることで、これにより日本の古代スラブ学は共通の術語で研究が進められることになる。

また教科書としての本書の持つ意義も非常に大きい。これまで主として外国語で書かれていた教科書が使われてきたが、そう長くない経験からしても本書の出現により学生の実力が大きく向上したことは明らかに観察される事実である。

本書は日本のスラブ学が国際的なレベルへと進む一里塚に建った金字塔である。